

1

リクガメがやってくる

1.1 リクガメってどんな生き物？

私たちがリクガメと生活したいと思ったのは、妹夫婦の家で飼育されている小さなギリシャリクガメを見た時でした。こんもりとした丸い甲羅に、まん丸の黒い瞳の持ち主の不思議な生き物。小さな口で不器用に、しかし、実に几帳面に、ちんげん菜の葉っぱを端から一口一口丹念に食べているその姿を見て、脳裏を電撃が走りました。まさに一目ぼれでした。それから、リクガメを飼っている人たちから飼育情報を集めてまわり、4ヵ月後に、はじめてわが家にもリクガメがやってくることとなりました。

それぞれが、最初にリクガメと出会った場面によって、かなり印象が違ってくるかもしれません。

動物園などでかなり成長したリクガメに出会ったのが最初だとすれば、そのドッシリとした丈夫そうな姿や、人間よりもずっと長い歴史を背負っているその姿にどこか威厳を感じる方もいると思います。一方、ペットショップで幼体の小さなリクガメに出会ったのが最初であるならば、そのかわいらしさがまず気に入ってしまうかもしれません。お友達の家で初めてリクガメに接したという方は、おそらくそれまで持っていたカメに対する印象の違いにビックリされたかもしれません。私たち日本人になじみの深いイシガメ、クサガメ、ミドリガメといったヌマガメに比べて、この野菜を食べ、陸に棲む甲高のカメはずいぶん奇妙に感じられるかもしれません。

リクガメとの生活を始めるにあたって、一つだけ初めに頭に置いておきたいことを挙げてみます。

それは、つきあいが長くなるということです。昔から長生きの代名詞のように言われているカメですが、実際適切な飼育環境を彼らに提供してあげることができれば、リクガメは実に長生きできる生き物です。人間よりも長生きできるリクガメは数多くいます。ギリシャリクガメでも100歳を越えた記録があります。したがって、一生のつきあいをしていくぐらいの気持ちでいてもよいでしょう。そういった意味では、リクガメと生活するということは、「ちょっとペットを飼ってみる」といった感覚とはずいぶん異なるものでしょう。一生の伴侶を得るといったところでしょうか。



1: リクガメがやってくる

1.2 リクガメを飼う前の心がまえ

ペットショップへ出かける前に、ちょっと頭に置いておいたほうがよいと思われることを少し書いておくことにしましょう。少しかたい話して申し訳ありませんが、最初に考えておきたいことがあります。

リクガメに限らず、動物を飼う時には当たり前のことですが、途中で飼えなくなってしまったから投げ出してしまったり、捨てるといったことは、決してやってはいけないということです。最後までめんどろをみることができるとか、冷静になって考えてみることもとても大切なことです。これだけは、どんなにかたい話してであるとしても飼育者としては、最低限の心がまえとして必要なことです。

では、リクガメについてみてみましょう。

まず、できるだけ、飼育したい種をあらかじめ絞り込んでおきたいものです。そうでなくても、いざペットショップでかわいいベビーリクガメたちを見てしまうと、浮気心が出てしまいます。その場ではなかなか冷静に考えるのがむずかしくなってしまうのです。

どの程度の大きさに成長するのか、飼育スペースを自分で確保できるだろうか、またその種にあった設備投資が可能かどうかなど、ついつい彼らの魅力に負けてしまって、なんとかなるさということになってしまいがちなのです。ベビーのうちには皆小さいので、対応できそうな気がしてしまいます。しかし、うっかりケツメリクガメを複数頭購入してしまったりすると、賃貸マンションなどにお住いの方は、じきに広い庭付きの家に移住を迫られることになってしまうでしょう。

カメの飼育書などで、60cmくらいの水槽やケージで、リクガメを飼っている図を見かけることがあると思いますが、そのような飼育方法が向くのは、幼体の頃の一時期だけです。

リクガメは、おそらく一般的に抱かれている鈍重なイメージとは異なり、非常によく運動をする生き物です。

特に、彼らは立体的な運動をしない生き物ですから、その分、生活スペースとして、平面的な広さが必要となります。

狭いケージに入れ放しの状態は、リクガメに多くのストレスを与えてしまい、とても気の毒な環境といえるでしょう。強いストレスから、長生きできなかつたりする話も多いのです。

わが家では、成体のカメは夏期はバルコニーに放し、冬期は屋内の約27畳程度のスペースで放し飼いをしています。実は、それでもスペース的には、足りないくらいなのです。

冬眠をさせない場合や、させてはいけない場合には、保温のための設備投資もそれなりに必要です。月々の電気代の請求書を見るのが、とても怖いという状況にもなるでしょう。

また、カメはトイレのしつけができませんので、複数飼育になってきますと、排泄物の始末も大変になってきます。

草食ですので、食べる量もかなりの量になります。彼らの胃袋を満たすだけの葉野菜を買う、経済的負担も、それなりに出てくるはずです。安全な雑草を採集するには、時間もとられます。



1: リクガメがやってくる

また、リクガメはお互いによく干渉します。小さいうちは、仲良さそうにしているとしても、成熟すると、激しい縄張り争いを繰り広げることもあります。そうになると、飼育スペースを仕切るという問題も生じてきます。

さらに、リクガメにかぎりませんが、日本では、まだまだ爬虫類の医療が進んでいません。もし、病気になってしまうと、診てもらえる病院を捜すだけでも苦労します。近くによい獣医師がない場合は、遠くの病院まで、つれて行くことにもなります。交通費や治療費で、相当の金額もかかるでしょう。この辺りが、ペットとして定着しているイヌやネコとはちがっています。

リクガメは昼行性ですので、世話の時間帯も、主に午前中から早い午後にかけてが、理想的になります。

ここまで読んだ方の中には、腰が引けてしまった方もいらっしゃるかもしれませんが、将来、このような事態に遭遇することもあるんだなと、心のどこかに留めておくだけでも、飼う姿勢がちがってくると思います。

マイナス要素ばかりを敢えて書きましたが、実際リクガメとの生活をはじめると、これらのことがまるで苦にならないのです。彼らはそれ以上のものを与えてくれることは受け合いです。野草摘みも日々の楽しみとなり、床に落された立派な便を拾いながら、今日も

カメは健康だなと満足し、月額6万円の電気料金の請求書も笑いとはせるような、魅力的な世界が待っています。



Memo CITES (ワシントン条約) について

ワシントン条約とは、正式名称を「絶滅のおそれのある野生動植物の種の国際取引に関する条約」といい、英名の「Convention on International Trade in Endangered Species of Wild Fauna and Flora」の頭文字をとって「CITES」とも呼ばれています。

この条約の目的は、絶滅のおそれのある野生生物の国際取引を規制し、乱獲を抑制することにより、これらを保護することです。日本は、1980年から加盟しています。

条約の付属書の中では、絶滅の危険があったり、保護の必要のある動植物が、その状況に応じて、I、II、IIIの三種類に分類されています。付属書Iに分類されているものは、最も絶滅の危機に瀕している種で、そのため規制が厳しく、商目的での取引(例えば、ペットとして輸入することなど)は禁止されています。付属書IIのものは、Iのものほどではないにしても、保護をしなければ、将来絶滅のおそれが出てくる可能性がある種です。輸出国の許可証等があれば、商目的での取引もできます。

リクガメ科のすべての種は、付属書II以上に含まれている希少動物です。

- II リクガメ科全種 Testudinidae
- I ガラパゴスゾウガメ *Geochelone nigra*
- I ホウシャガメ *Geochelone radiata*
- I ヘサキリクガメ *Geochelone yniphora*
- I メキシコゴファーガメ *Gopherus flavomarginatus*
- I ホシヤブガメ *Psammobates geometricus*
- I エジプトリクガメ *Testudo Kleinmanni*